III. 調査結果

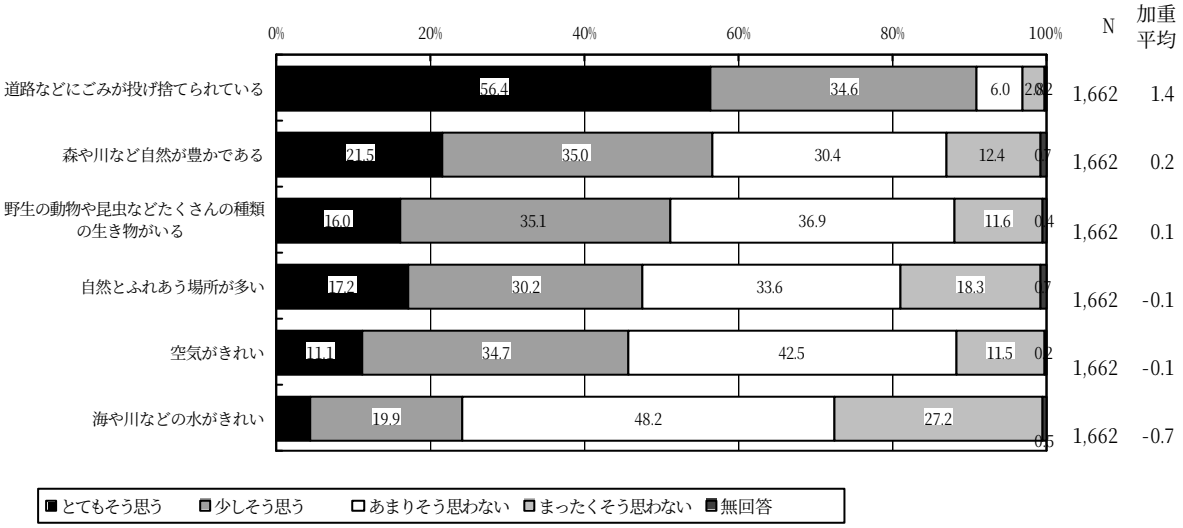
１．身のまわりの環境認識（問１）

「森や川などの自然が豊か」「野生の動物や昆虫などたくさんの種類の生き物がいる」と認識する子どもは過半数を超えるが、「海や川などの水がきれい」との認識は４人に１人にとどまり、91%が「道路などにごみが投げ捨てられている」と認識している。

身のまわりの環境の認識を尋ねたところ、環境を肯定的にとらえたものとしては、「森や川など自然が豊かである」「野生の動物や昆虫などたくさんの種類の生き物がいる」の肯定率（「とてもそう思う」と「少しそう思う」の合計）がそれぞれ 57%、51%と 50%を超えた。「空気がきれい」「自然とふれあう場所が多い」についてはやや肯定率が低く、それぞれ 46%、47%となっている。

一方、環境の悪化を認識するものとしては、「道路などにごみが投げ捨てられている」の肯定率が 91%、「海や川などの水がきれい」の否定率（「あまりそう思わない」と「まったくそう思わない」の合計）が 75%となっている。

【図表 1-1】身のまわりの環境認識（全体）



注）この項の加重平均は、「とてもそう思う」に２点、「少しそう思う」に１点、「あまりそう思わない」に－１点、「まったくそう思わない」に－２点を与えて算出した。

小学生は中学生よりも「空気がきれい」「海や川などの水がきれい」「森や川など自然が豊か」「野生の動物や昆虫などたくさんの種類の生き物がいる」と認識する傾向がみられる。

性別による認識の差はあまりないが、都市規模別にみると、都市規模が小さくなるほど「空気がきれい」「海や川などの水がきれい」「森や川など自然が豊か」「野生の動物や昆虫などたくさんの種類の生き物がいる」「自然とふれあう場所が多い」と認識する率が高く、特に町村部では「空気がきれい」「野生の動物や昆虫などたくさんの種類の生き物がいる」「自然とふれあう場所が多い」が 71～75%、「森や川など自然が豊か」が 81%と高い。そうした中で「道路などにごみが捨てられている」状態は都市規模に関わりなく全国に拡がっているといえ、どの都市規模でも 88～94%を示している。

【図表 1-2】身のまわりの環境認識（学齢別、性別、都市規模別）
（「とてもそう思う」と「少しそう思う」の合計比率）

（%）

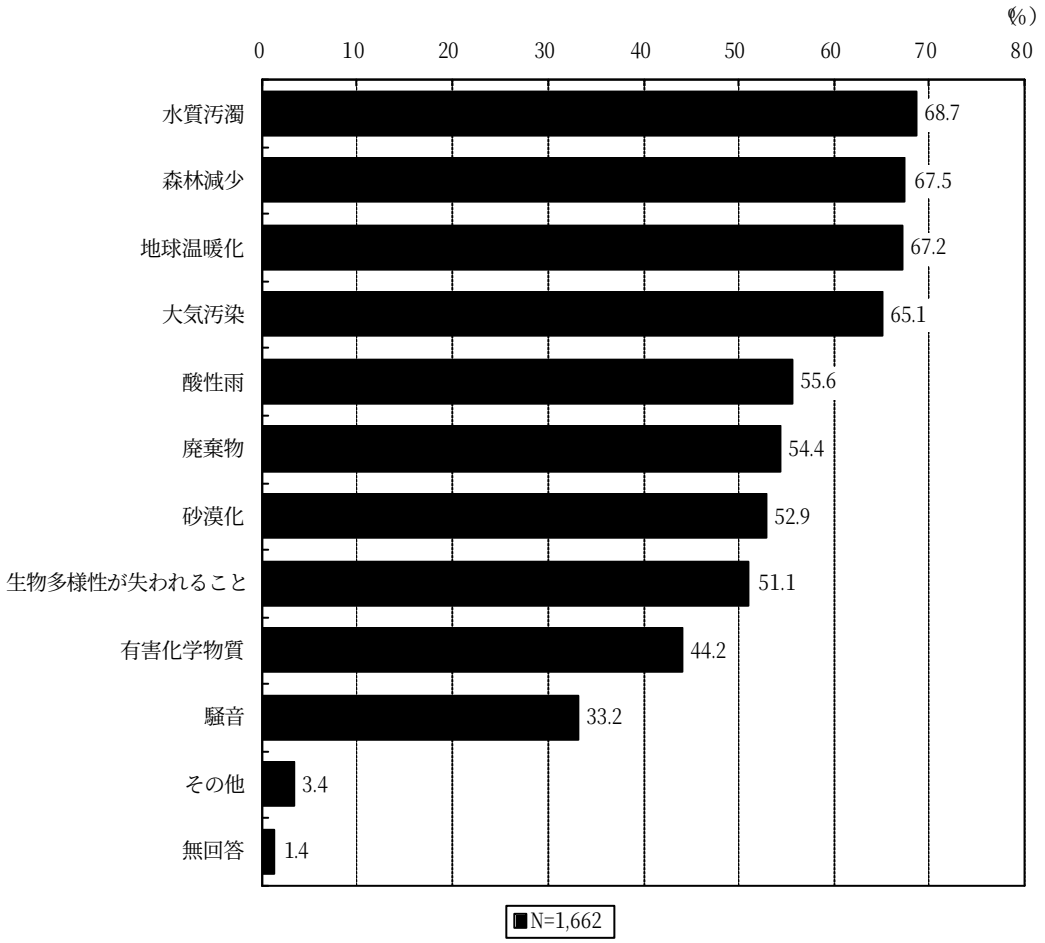
	全体	学齢別		性別		都市規模別			
		小学生	中学生	男子	女子	政令指定都市	10万人以上	10万人未満	町村
調査数	1,662	755	907	881	772	299	538	341	484
空気がきれい	45.8	51.5	41.0	46.7	45.2	18.1	29.3	60.4	70.8
海や川などの水がきれい	24.1	27.3	21.4	25.1	22.9	8.7	8.3	36.6	42.2
森や川など自然が豊かである	56.5	63.0	51.1	55.2	58.4	24.4	41.9	73.3	80.8
野生の動物や昆虫などたくさんの種類の生き物がいる	51.1	58.8	44.7	52.6	49.3	28.1	39.0	56.3	75.0
自然とふれあう場所が多い	47.4	49.5	45.7	46.4	48.7	15.4	34.1	63.3	70.9
道路などにごみが投げ捨てられている	91.0	91.3	90.8	89.4	92.9	94.0	92.6	90.0	88.2

２．環境問題の関心（問２）

環境問題についての関心領域は幅広く、特に「水質汚濁」「森林減少」「地球温暖化」「大気汚染」に対する関心が高い。

環境問題への関心の有無を尋ねたところ、最も関心が高い項目は「水質汚濁」（69%）で、「森林減少」（68%）、「地球温暖化」（67%）、「大気汚染」（65%）と続く。また、これらに加え、「酸性雨」（56%）、「廃棄物」（55%）、「砂漠化」（53%）、「生物多様性が失われること」（51%）にも 50%以上が関心を示しており、関心領域も幅広いものとなっている。これに対し、「有害化学物質」（44%）、「騒音」（33%）に対する関心はやや低くなっている。

【図表 2-1】環境問題の関心（複数回答）（全体）



「地球温暖化」以外はいずれも中学生より小学生の関心が高い。特に大きな差が開いているものは「水質汚濁」「森林減少」「砂漠化」「生物多様性が失われること」で小学生の関心度が中学生の関心度を 15～18 ポイント上回っている。

性別による差はあまりないが、都市規模別では政令指定都市で「大気汚染」（74%）、10 万人未満で「地域温暖化」（74%）、町村部で「生物多様性が失われること」（57%）に対する関心が全体に比べやや高くなっている。

【図表 2-1】環境問題の関心（複数回答）（学齢別、性別、都市規模別）

（%）

	全体	学齢別		性別		都市規模別			
		小学生	中学生	男子	女子	政令指定都市	10万人以上	10万人未満	町村
調査数	1,662	755	907	881	772	299	538	341	484
水質汚濁	68.7	78.5	60.4	66.9	70.7	68.6	68.4	63.3	72.7
森林減少	67.5	75.6	60.7	65.9	69.6	70.6	64.7	63.9	71.3
地球温暖化	67.2	67.0	67.4	67.4	67.0	63.5	64.5	73.6	68.0
大気汚染	65.1	69.7	61.3	63.1	67.2	74.2	62.1	61.6	65.3
酸性雨	55.6	61.9	50.4	54.4	56.9	55.5	50.9	56.9	59.9
廃棄物	54.4	60.9	49.0	52.7	56.3	52.2	58.9	44.9	57.4
砂漠化	52.9	60.8	46.3	52.0	53.8	54.5	51.1	50.7	55.4
生物多様性が失われること	51.1	59.9	43.8	52.2	49.6	50.8	48.5	46.9	57.0
有害化学物質	44.2	49.5	39.8	45.7	42.2	48.5	41.4	43.7	45.0
騒音	33.2	35.5	31.2	33.1	33.3	39.1	35.7	24.3	32.9
その他	3.4	4.6	2.4	4.2	2.3	5.4	2.0	2.1	4.8
無回答	1.4	0.7	2.0	2.0	0.6	2.0	1.1	0.6	1.9

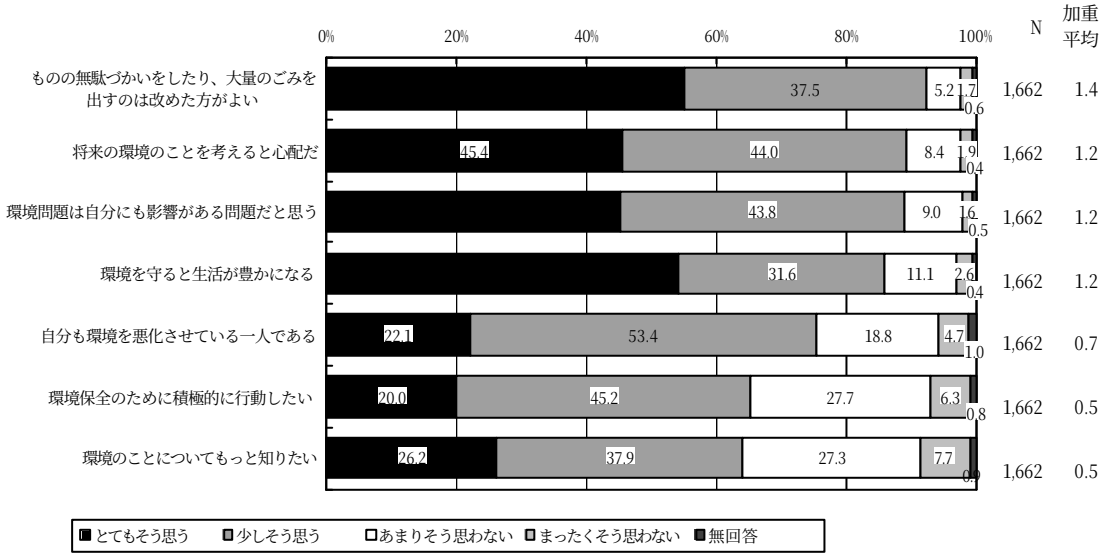
３．環境問題に対する考え方（問３）

「ものの無駄づかいをしたり、大量のごみを出したりする今の生活は、改めた方がよい」「環境を守ると生活が豊かになる」「将来の環境のことを考えると心配だ」「環境問題は自分にも影響がある問題だと思う」という考え方は広く浸透している。しかし、「環境保全のために積極的に行動したい」「環境のことについてもっと知りたい」といった自分自身の生活や行動に関わる意識はやや低い。

環境問題に対する考え方は、「ものの無駄づかいをしたり、大量のごみを出したりする今の生活は、改めた方がよい」「将来の環境のことを考えると心配だ」「環境問題は自分にも影響がある問題だと思う」「環境を守ると生活が豊かになる」の 肯定率（「とてもそう思う」と「少しそう思う」の合計）は９割前後にのぼっており、これらの考え方が子どもの間で浸透しているといえる。

これらに比べると、自分自身の生活や行動に関する項目の肯定率はやや低く、「自分も環境を悪化させている一人である」76%、「環境保全のために積極的に行動したい」65%、「環境のことについてもっと知りたい」64%となっている。

【図表 3-1】環境問題に対する考え方（全体）



注）この項の加重平均は、「とてもそう思う」に２点、「少しそう思う」に１点、「あまりそう思わない」に－１点、「まったくそう思わない」に－２点を与えて算出した。

小学生は中学生よりも「環境のことをもっと知りたい」（73%）、「環境保全のために積極的に行動したい」（73%）、「環境を守ると生活が豊かになる」（93%）という意識が強い。

性別にみると、女子は男子よりも「環境保全のために積極的に行動したい」（73%）という意識が高くなっている。

都市規模別では、町村部で「環境のことについてもっと知りたい」「環境保全のために積極的に行動したい」（各 74%）、「環境を守ると生活が豊かになる」（90%）という意識が全体に比べ高いという特徴がみられる。

【図表 3-2】環境問題に対する考え方（学齢別、性別、都市規模別）
（「とてもそう思う」と「少しそう思う」の合計比率）

（%）

	全体	学齢別		性別		都市規模別			
		小学生	中学生	男子	女子	政令指定都市	10万人以上	10万人未満	町村
調査数	1,662	755	907	881	772	299	538	341	484
将来の環境のことを考えると心配だ	89.4	90.8	88.2	86.5	93.1	87.0	88.0	91.2	91.4
環境問題は自分にも影響がある問題だと思う	88.9	90.1	88.0	86.4	92.0	87.9	89.6	89.4	88.5
ものの無駄づかいをしたり、大量のごみを出すのは改めた方がよい	92.5	92.3	92.6	90.5	94.9	92.0	92.0	94.1	92.2
自分も環境を悪化させている一人である	75.5	73.1	77.5	72.9	78.9	78.3	71.7	78.0	76.3
環境のことについてもっと知りたい	64.1	73.3	56.5	61.0	67.8	58.9	60.2	60.4	74.4
環境保全のために積極的に行動したい	65.2	72.9	58.8	58.9	72.6	57.2	62.5	64.0	74.1
環境を守ると生活が豊かになる	85.9	93.3	79.7	85.7	86.4	86.6	83.6	83.0	90.1

４．環境保全行動の実態と今後の意向

４－１　環境保全行動（問４）

「水道の蛇口をきちんと閉める」「テレビや部屋などのあかりを消す」「ものは大切に使う」「ごみをきちんと分別する」という行動はほぼ定着し、「家で花や木を植える」「鉛筆やノートは環境に良いものを使う」の実施率も高い。しかし、「地域の掃除などに参加する」「買い物のときレジ袋をもらわない」「家族や友達などと環境問題について話し合う」の実施率は２分の１以下にとどまった。

日頃の生活における環境保全行動では、

- 「使わないときは、水道の蛇口をきちんと閉める」
- 「使わないときは、テレビや部屋などのあかりを消す」
- 「ものは長く使えるように大切に使う」
- 「ごみを、燃えるゴミ、燃えないゴミ、資源ゴミに、きちんと分別する」

という行動がほぼ定着しており、これらの実施率（「行っている」と「ときどき行っている」の合計）は 85～97%に達している。また、

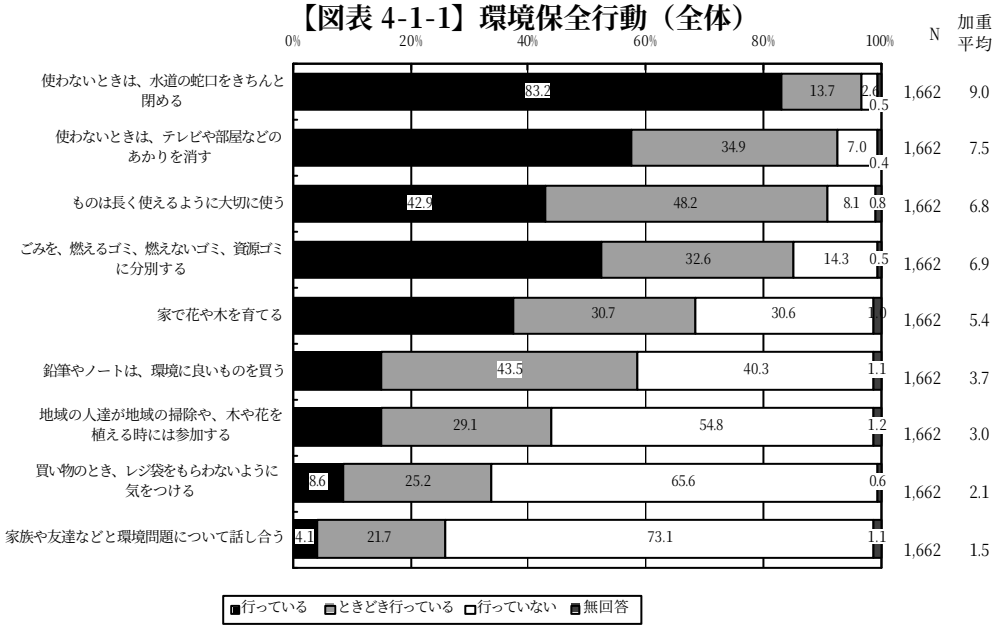
- 「家で花や木を育てる」
- 「鉛筆やノートは、環境に良いものを使う」

の実施率も 68%、59%と比較的高い。しかし、

- 「地域の人たちが、地域の掃除や、木や花を植える時には参加する」
- 「買い物のとき、レジ袋をもらわないように気をつける」
- 「家族や友達などと環境問題について話し合う」

の実施率は低く、いずれも 50%に達していない。

【図表 4-1-1】環境保全行動（全体）



注）この項の加重平均は、「行っている」に 10 点、「ときどき行っている」に５点、「行っていない」に０点を与えて算出した。

どの行動の実施率も小学生が中学生を上回っているが、特に「地域の人たちが、地域の掃除や、木や花を植える時に参加する」「鉛筆やノートは、環境に良いものを使う」での差が大きく、これらの実施率は小学生が中学生を 20 ポイント以上上回っている。

性別にみると、女子の実施率が「家で花や木を育てる」（77%）、「ごみを、燃えるゴミ、燃えないゴミ、資源ゴミに、きちんと分別する」（91%）で男子を大きく上回っている。

都市規模別では、都市規模が小さくなるほど「ごみを、燃えるゴミ、燃えないゴミ、資源ゴミに、きちんと分別する」「地域の人たちが、地域の掃除や、木や花を植える時には参加する」の実施率が高くなる傾向がみられる。また、町村部は「家族や友人などと環境問題について話し合う」（33%）、「鉛筆やノートは、環境に良いものを買う」（68%）という行動が他の都市規模に比べ高いという特徴もある。

【図表 4-1-2】環境保全行動（学齢別、性別、都市規模別）
（「行っている」と「ときどき行っている」の合計比率）

（%）

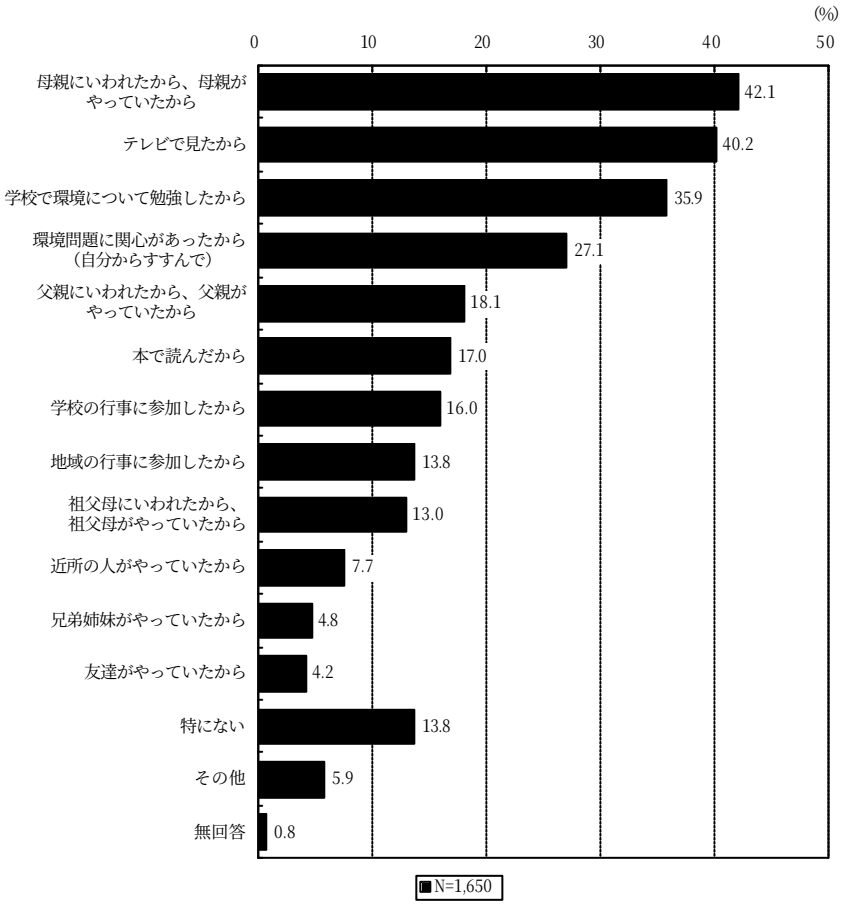
	全体	学齢別		性別		都市規模別			
		小学生	中学生	男子	女子	政令指定都市	10万人以上	10万人未満	町村
調査数	1,662	755	907	881	772	299	538	341	484
使わないときは、テレビや部屋などのあかりを消す	92.6	94.0	91.4	91.2	94.3	91.3	91.1	94.4	93.9
使わないときは、水道の蛇口をきちんと閉める	96.9	98.2	95.8	96.1	97.6	97.3	96.7	96.5	97.1
家で花や木を育てる	68.4	75.2	62.8	61.3	76.6	67.2	68.2	63.6	72.7
ごみを、燃えるゴミ、燃えないゴミ、資源ゴミに分別する	85.1	87.6	83.1	80.0	91.0	82.6	84.2	85.7	87.4
地域の人達が地域の掃除や、木や花を植える時には参加する	44.1	57.6	32.7	42.8	45.6	33.8	35.5	41.6	61.5
ものは長く使えるように大切に使う	91.1	93.2	89.3	90.2	92.3	91.3	90.0	90.0	93.0
家族や友達などと環境問題について話し合う	25.8	32.6	20.1	24.6	26.9	22.4	23.6	21.5	33.3
鉛筆やノートは、環境に良いものを買う	58.6	70.1	49.0	57.7	59.8	57.9	55.2	51.9	67.5
買い物のとき、レジ袋をもらわないように気をつける	33.8	41.1	27.7	33.9	33.4	37.4	35.5	24.1	36.4

４－２　環境保全行動の契機（問５）

環境保全行動は、母親・テレビ・学校の影響で始めた子どもが多い。特に小学生で学校、テレビ、女子で母親の影響が強い。

４－１の環境保全行動を１つでも行った子どもに対し、行い始めた契機を尋ねたところ、「母親にいわれたから、母親がやっていたから」が 42%、「テレビで見たから」が 40%、「学校で環境について勉強したから」という回答が 36%となっており、母親・テレビ・学校の影響が特に強い。この３項目以外では、「環境問題に関心があったから」（27%）が比較的多いが、父親、祖父母、兄弟姉妹といった母親以外の家族や友達、学校や地域の行事などの影響はあまりない。

【図表 4-2-1】環境保全行動の契機（複数回答）（全体）



小学生は中学生に比べ「学校で環境について勉強したから」（52%）、「テレビで見たから」（46%）、「環境問題に関心があったから」（33%）、「本で読んだから」（24%）、「学校の行事に参加したから」（20%）、「地域の行事に参加したから」（21%）という回答が多くみられる。

性別にみると、女子は男子よりも「母親にいわれたから、母親がやっていたから」（48%）、「学校で環境について勉強したから」（39%）という回答が多いという特徴がある。

都市規模別では、町村部で「学校で環境について勉強したから」（45%）、「地域の行事に参加したから」（22%）が他の都市規模に比べ多くみられる。

【図表 4-2-2】環境保全行動の契機（複数回答）（学齢別、性別、都市規模別）

（%）

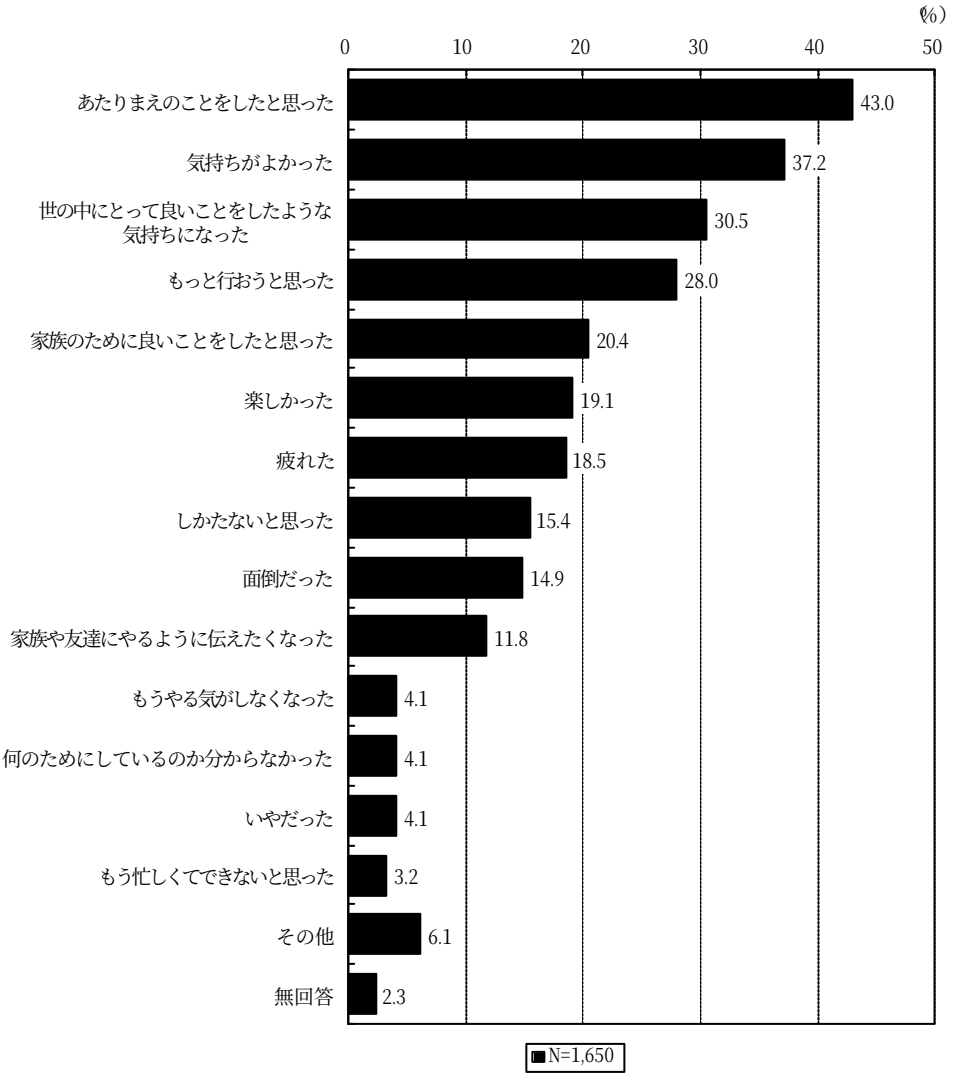
	全体	学齢別		性別		都市規模別			
		小学生	中学生	男子	女子	政令指定都市	10万人以上	10万人未満	町村
調査数	1,650	753	897	872	769	297	531	339	483
母親にいわれたから、母親がやっていたから	42.1	40.2	43.6	36.8	47.6	40.4	44.4	44.0	39.1
テレビで見たから	40.2	46.2	35.1	39.3	41.1	38.4	40.5	39.2	41.6
学校で環境について勉強したから	35.9	51.9	22.4	32.9	39.3	36.0	34.5	25.1	44.9
環境問題に関心があったから（自分からすすんで）	27.1	33.1	22.1	25.3	28.9	25.3	25.8	24.2	31.7
父親にいわれたから、父親がやっていたから	18.1	19.0	17.4	18.8	17.3	17.2	16.9	21.2	17.8
本で読んだから	17.0	23.6	11.4	17.5	16.1	15.8	15.1	16.8	19.9
学校の行事に参加したから	16.0	20.1	12.6	16.9	15.1	14.8	15.1	17.7	16.6
地域の行事に参加したから	13.8	20.7	7.9	14.0	13.5	7.7	10.0	13.9	21.5
祖父母にいわれたから、祖父母がやっていたから	13.0	15.5	10.8	12.3	13.8	8.4	9.8	15.6	17.4
近所の人がやっていたから	7.7	10.6	5.2	8.6	6.8	5.7	7.9	5.9	9.9
兄弟姉妹がやっていたから	4.8	4.4	5.2	4.8	4.9	5.7	5.1	5.0	3.9
友達がやっていたから	4.2	5.6	3.0	5.6	2.6	6.7	3.6	3.8	3.5
特にない	13.8	8.5	18.3	16.3	11.2	16.5	15.4	14.7	9.7
その他	5.9	5.2	6.5	7.1	4.3	6.7	6.6	5.3	5.0
無回答	0.8	0.7	1.0	1.3	0.4	1.7	0.6	0.9	0.6

４－３　環境保全行動の際の気持ち（問６）

環境保全行動を行った際の気持ちは「あたりまえのことをした」「気持ちがよかった」「世の中にとって良いことをしたような気持ち」「もっと行おうと思った」が上位にあり、環境保全に前向きな姿勢があらわれている。

４－１に示した環境保全行動を１つでも行った子どもに対し、行った際の気持ちを尋ねたところ、「あたりまえのことをしたと思った」（43%）、「気持ちがよかった」（37%）が４割前後で上位となった。これらに加え、「世の中にとって良いことをしたような気持ちになった」（31%）、「もっと行おうと思った」（28%）という気持ちも３割前後と強い。また、「疲れた」（19%）、「しかたがないと思った」「面倒だった」（各 15%）、「もうやる気がしなくなった」「何のためにしているのか分からなかった」（各４%）という気持ちは相対的に弱く、環境保全行動に前向きに取り組もうとする姿勢が示されている。

【図表 4-3-1】環境保全行動の際の気持ち（複数回答）（全体）



小学生は、「気持ちがよかった」（52%）、「世の中にとって良いことをしたような気持ちになった」（43%）、「もっと行おうと思った」（38%）、「家族のために良いことをしたと思った」（29%）の比率が高い。これに対し、中学生は、「あたりまえのことをしたと思った」（48%）という意識が強く、「しかたがない」（20%）という意識も小学生に比べ強くなっている。

性別にみると、女子は「あたりまえのことをしたと思った」（47%）、「気持ちがよかった」（40%）、「世の中にとって良いことをしたような気持ちになった」（34%）、「もっと行おうと思った」（36%）という意識が強いのに対し、男子は「疲れた」（25%）、「面倒だった」（18%）という意識がやや強くなっている。

都市規模別では、10 万人未満で「面倒だった」（20%）、町村部で「気持ちがよかった」（45%）、「世の中にとって良いことをしたような気持ちになった」（36%）、「もっと行おうと思った」（33%）、「楽しかった」（26%）という意識が全体に比べやや高くなっている

【図表 4-3-2】環境保全行動の際の気持ち（複数回答）（学齢別、性別、都市規模別）

（%）

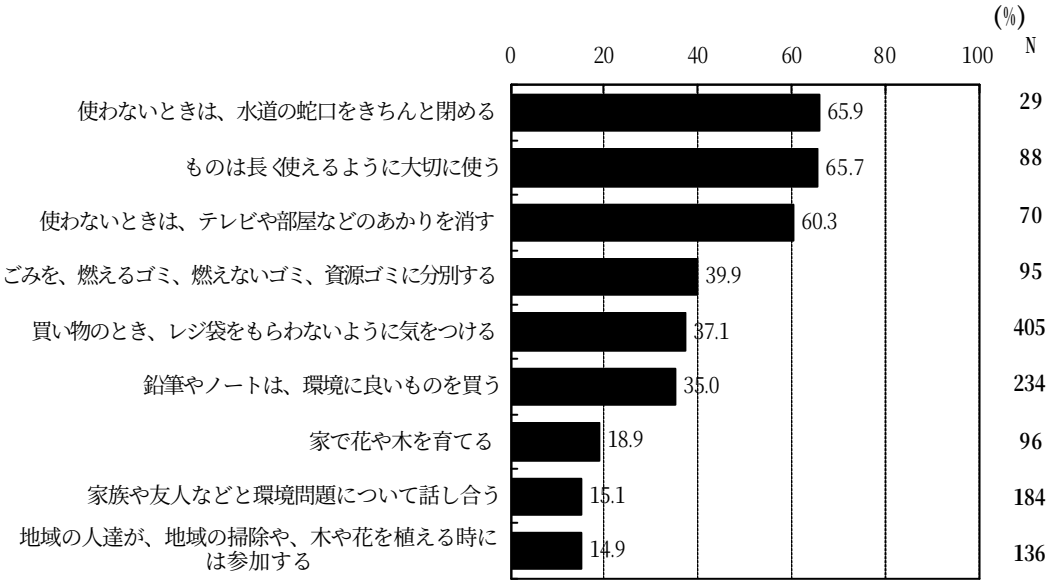
	全体	学齢別		性別		都市規模別			
		小学生	中学生	男子	女子	政令指定都市	10万人以上	10万人未満	町村
調査数	1,650	753	897	872	769	297	531	339	483
あたりまえのことをしたと思った	43.0	37.2	47.9	40.0	46.7	45.1	43.7	45.7	39.1
気持ちがよかった	37.2	51.8	24.9	34.7	40.1	36.0	33.3	33.0	44.9
世の中にとって良いことをしたような気持ちになった	30.5	42.8	20.2	27.8	33.7	26.6	29.4	28.3	35.6
もっと行おうと思った	28.0	37.7	19.8	21.4	35.8	26.6	28.4	21.2	33.1
家族のために良いことをしたと思った	20.4	29.3	12.8	18.7	22.4	18.5	18.5	21.2	23.0
楽しかった	19.1	29.1	10.7	18.5	19.8	17.8	16.0	15.0	26.1
疲れた	18.5	21.5	15.9	24.7	11.3	14.8	17.7	21.2	19.7
しかたないと思った	15.4	10.0	20.0	18.5	11.6	15.2	14.5	19.5	13.7
面倒だった	14.9	11.3	17.9	18.2	10.8	13.8	15.6	20.1	11.2
家族や友達にやるように伝えたくなった	11.8	17.1	7.2	9.1	14.8	8.4	11.1	10.3	15.5
もうやる気がしなくなった	4.1	4.5	3.7	6.0	1.6	4.0	3.4	4.4	4.6
何のためにしているのか分からなかった	4.1	4.0	4.1	5.7	2.2	3.7	3.8	5.9	3.3
いやだった	4.1	4.6	3.7	5.6	2.2	2.7	3.8	5.3	4.6
もう忙しくてできないと思った	3.2	4.1	2.3	4.6	1.3	2.7	3.2	2.7	3.7
その他	6.1	4.8	7.1	5.4	6.9	6.4	7.2	5.9	4.8
無回答	2.3	1.6	2.9	2.5	2.1	4.4	1.7	1.5	2.3

４－４　環境保全行動に対する今後の意向（問７）

「水道の蛇口をきちんと閉める」「ものは長く使えるように大切に使う」「テレビや部屋などのあかりを消す」の行動意向が全般的に高く、このうち、「テレビや部屋などのあかりを消す」「水道の蛇口をきちんと閉める」は都市規模が小さくなるほどその行動意向が強くなっている。

４－１の環境保全行動のそれぞれについて「行っていない」と回答した子どもが、今後は行おうと思っている環境保全行動は、「使わないときは、水道の蛇口をきちんと閉める」（66%）、「ものは長く使えるよう大切に使う」（66%）、「使わないときは、テレビや部屋などのあかりを消す」（60%）が６割前後と上位を占めた。また、「ごみを、燃えるゴミ、燃えないゴミ、資源ゴミに分別する」（40%）、「買い物のとき、レジ袋をもらわないように気をつける」（37%）、「鉛筆やノートは、環境に良いものを買う」（35%）も３割にのぼった。しかし、「家で花や木を育てる」（19%）、「家族や友人などと環境問題について話し合う」（15%）、「地域の人たちが、地域の掃除や、木や花を植える時には参加する」（15%）は２割を下回った。

【図表 4-4-1】環境保全行動に対する今後の意向（全体）



どの項目の行動意向も小学生が中学生を上回っているが、特に「家で花や木を育てる」（61%）「地域の人たちが、地域の掃除や、木や花を植える時には参加する」（44%）の差が大きく、この２項目の比率は小学生が中学生を 21 ポイント上回っている。

性別にみると、すべての行動意向で女子が男子を上回っているが、特に「家で花や木を育てる」（59%）「ごみを、燃えるゴミ、燃えないゴミ、資源ゴミに分別する」（76%）での差が大きい。

都市規模別では、都市規模が小さくなるほど「使わないときは、テレビや部屋のあかりを消す」「使わないときは、水道の蛇口をきちんと閉める」「家で花や木を育てる」の意向が強い傾向にある。また、町村部は他の都市規模よりも「鉛筆やノートは、環境に良いものを買う」（60%）、「地域の人たちが、地域の掃除や、木や花を植える時には参加する」（46%）「家族や友人などと環境問題について話し合う」（28%）の意向が強く出ている。

【図表 4-4-2】環境保全行動に対する今後の意向（学齢別、性別、都市規模別）

（%）

	全体	学齢別		性別		都市規模別			
		小学生	中学生	男子	女子	政令指定都市	１０万人以上	１０万人未満	町村
調査数	1,662	755	907	881	772	299	538	341	484
使わないときは、テレビや部屋などのあかりを消す	83.0	84.6	81.6	80.0	86.4	76.6	83.1	84.2	86.0
使わないときは、水道の蛇口をきちんと閉める	81.1	84.9	77.9	78.9	84.2	75.9	80.3	81.8	84.7
ものは長く使えるように大切に使う	77.0	82.9	72.0	74.0	80.4	72.6	77.5	75.1	80.4
ごみを、燃えるゴミ、燃えないゴミ、資源ゴミに分別する	68.5	71.7	65.9	62.8	75.5	69.6	66.0	67.4	71.5
鉛筆やノートは、環境に良いものを買う	54.6	63.0	47.6	51.6	58.3	53.2	54.3	48.4	60.3
家で花や木を育てる	49.2	60.8	39.6	40.9	58.7	43.1	47.0	48.4	56.0
買い物のとき、レジ袋をもらわないように気をつける	48.4	53.8	44.0	44.0	53.5	48.8	49.1	41.9	52.1
地域の人達が、地域の掃除や、木や花を植える時には参加する	32.9	44.1	23.5	29.5	37.0	23.7	29.7	27.0	46.1
家族や友人などと環境問題について話し合う	23.3	29.7	18.1	20.9	26.2	20.7	23.2	18.8	28.3
無回答	1.8	0.8	2.6	2.3	1.3	3.3	1.5	0.9	1.9

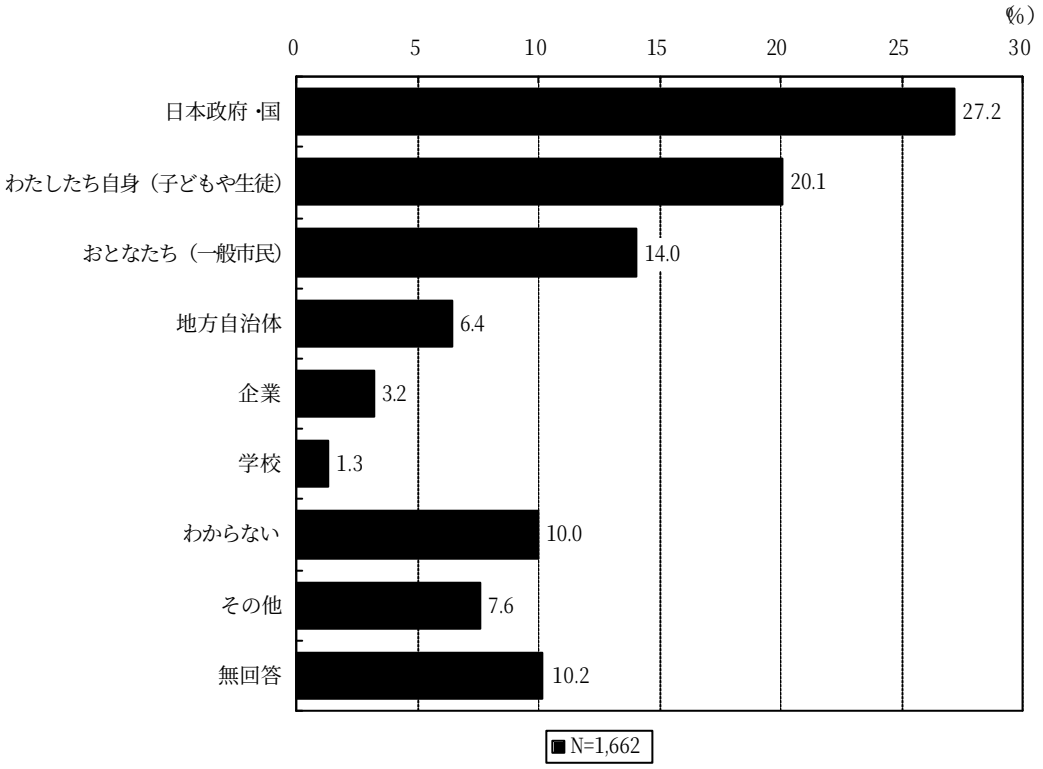
５．環境保全に重要な役割を担うもの（問８）

環境保全に重要な役割を担うものとしては、「日本政府・国」をあげた割合が 27%で最も高い。中学生では「おとなたち（一般市民）」をあげた割合も 16%とやや高い。

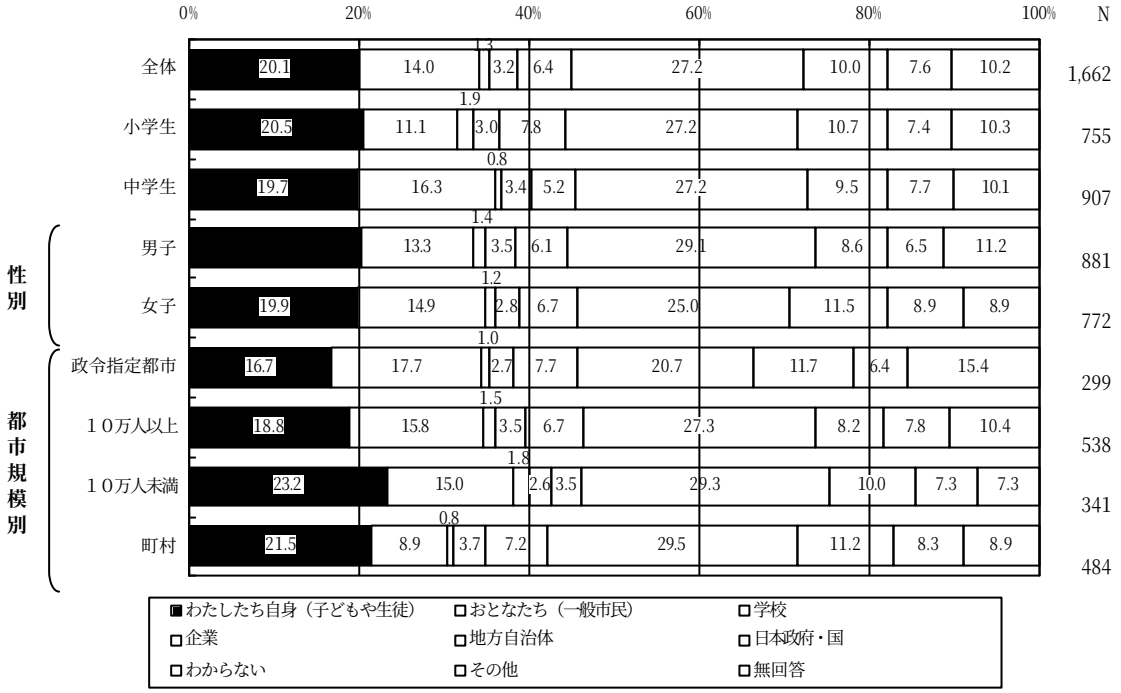
環境保全のために重要な役割を担うものを尋ねたところ、「日本政府・国」を選択した割合が 27%で最も高く、「わたしたち自身（子どもや生徒）」（20%）がこれに次ぐ。以下「おとなたち（一般市民）」（14%）、「地方自治体」（６%）の順となっている。

中学生は小学生に比べ「おとなたち（一般市民）」とする比率（16%）がやや高い。（性別、都市規模別に有意な差は出ていない。）

【図表 5-1】環境保全に重要な役割を担うもの（全体）



【図表 5-2】環境保全に重要な役割を担うもの（学齢別、性別、都市規模別）

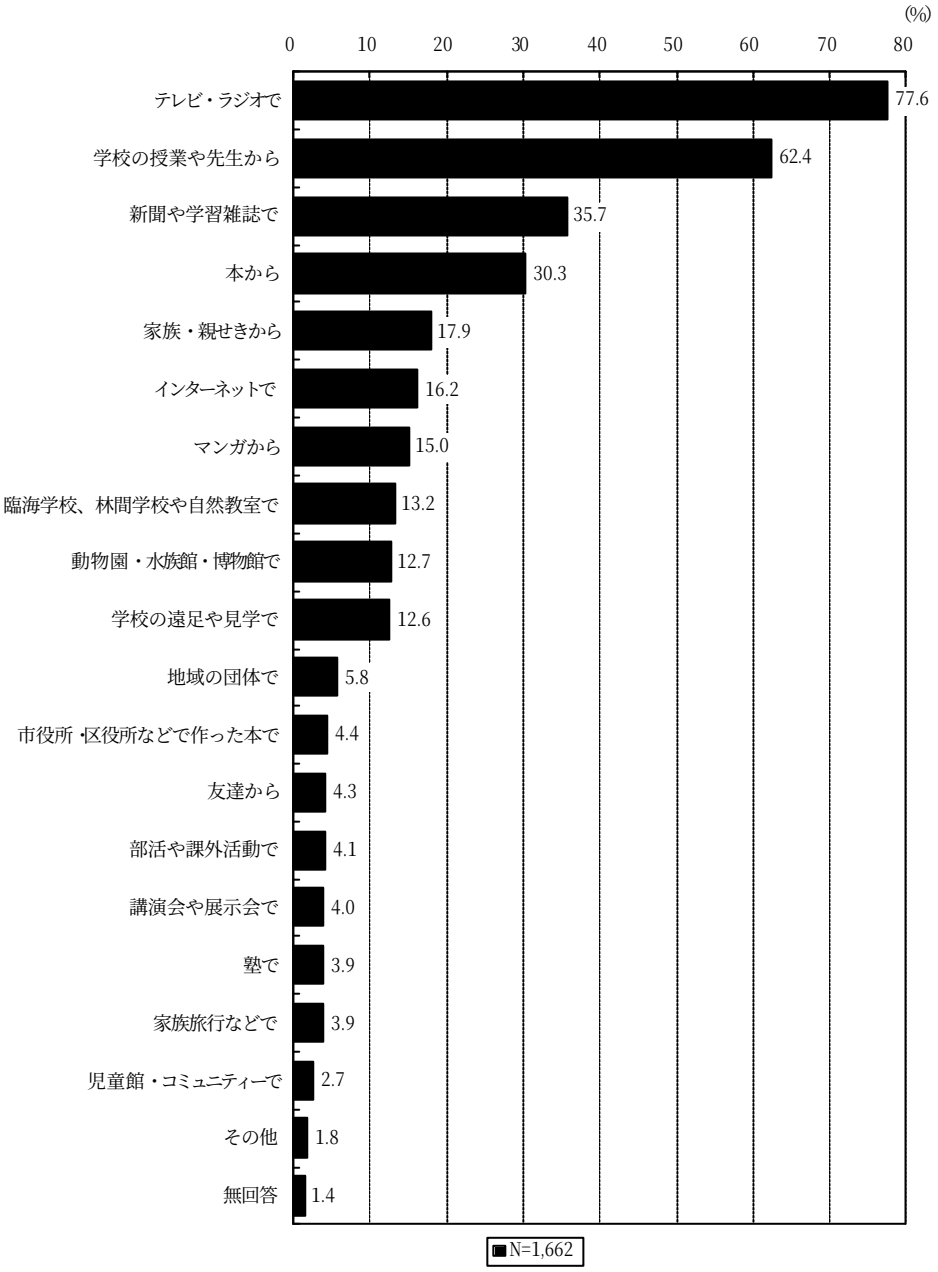


６．環境問題に関する情報の入手経路（問９）

環境問題に関する情報は、「テレビ・ラジオ」（78%）、「学校の授業や先生」（62%）が２大情報源となっている。小学生は「学校の授業や先生」（73%）、中学生は「テレビ・ラジオ」（83%）が最大の情報源である。

環境問題に関する情報の入手経路は「テレビ・ラジオで」（78%）と「学校の授業や先生から」（62%）が特に多く、２大情報源となっている。30～40%の支持率があったものとしては「新聞や学習雑誌で」（36%）、「本から」（30%）、15～20%の支持率があったものとしては「家族・親せきから」（18%）、「インターネットで」（16%）、「マンガから」（15%）がある。一方、「市役所・区役所などで作った本で」（４%）、「友達から」（４%）、「部活や課外活動で」（４%）、「講演会や展示会で」（４%）、「塾で」（４%）、「家族旅行などで」（４%）、「児童館・コミュニティーで」（３%）などは５%を下回っており、情報としての知識獲得は盛んでも参加・体験型の知識獲得は少ない。

【図表 6-1】環境問題に関する情報の入手経路（複数回答）（全体）



小学生は中学生よりも「学校の授業や先生から」（73%）、「本から」（36%）、「臨海学校、林間学校や自然教室で」（17%）、「学校の遠足や見学で」（18%）、「動物園・水族館・博物館で」（19%）が多く、逆に中学生は小学生よりも「テレビ・ラジオで」（83%）が多い。

性別にみると、女子は男子よりも「学校の授業や先生から」（69%）の情報入手が多い。

都市規模別では、政令指定都市で「臨海学校、林間学校や自然教室で」（22%）、町村部で「学校の授業や先生から」（69%）、「本から」（38%）、「インターネットで」（22%）が全体に比べやや高くなっている。

【図表 6-2】環境問題に関する情報の入手経路（複数回答）（学齢別、性別、都市規模別）

（%）

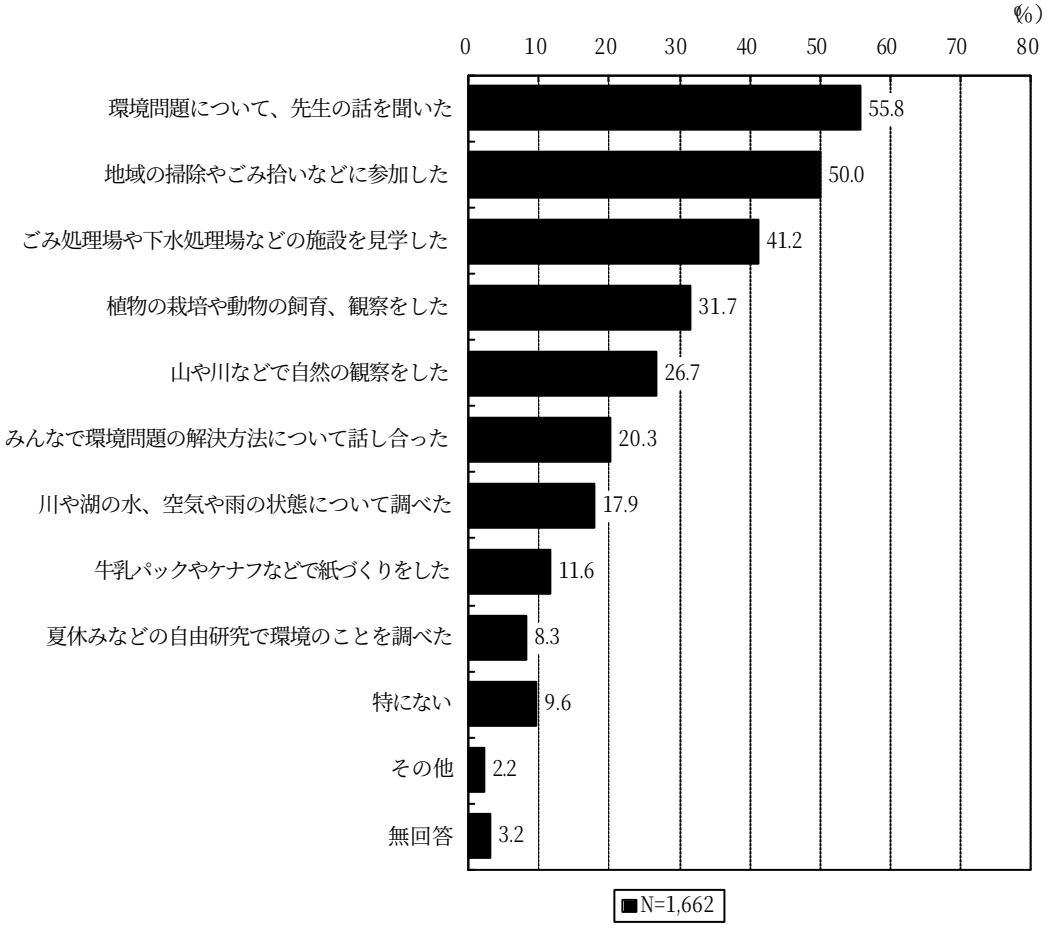
	全体	学齢別		性別		都市規模別			
		小学生	中学生	男子	女子	政令指定都市	10万人以上	10万人未満	町村
調査数	1,662	755	907	881	772	299	538	341	484
テレビ・ラジオで	77.6	71.5	82.6	77.8	77.1	77.9	80.5	80.6	71.9
学校の授業や先生から	62.4	72.6	53.9	56.5	69.0	60.2	62.3	55.1	69.0
新聞や学習雑誌で	35.7	35.0	36.3	35.5	35.8	35.5	35.1	37.0	35.5
本から	30.3	36.2	25.4	30.3	30.2	25.8	27.7	27.6	37.8
家族・親せきから	17.9	19.7	16.4	17.0	18.9	15.7	18.4	21.7	16.1
インターネットで	16.2	20.1	12.9	16.7	15.7	14.7	14.3	11.7	22.3
マンガから	15.0	17.6	12.8	17.6	11.9	12.4	16.4	14.1	15.7
臨海学校、林間学校や自然教室で	13.2	17.4	9.7	13.2	13.1	22.4	13.2	7.3	11.6
動物園・水族館・博物館で	12.7	18.9	7.5	12.4	13.2	14.0	11.3	8.2	16.5
学校の遠足や見学で	12.6	17.6	8.5	12.1	13.3	12.7	11.0	10.6	15.9
地域の団体で	5.8	7.8	4.2	6.4	5.2	4.7	5.4	5.9	7.0
市役所・区役所などで作った本で	4.4	4.4	4.4	5.6	3.0	3.3	5.6	3.5	4.3
友達から	4.3	6.2	2.8	4.8	3.6	4.0	3.2	3.8	6.2
部活や課外活動で	4.1	4.6	3.6	5.6	2.5	2.7	5.6	1.5	5.2
講演会や展示会で	4.0	3.4	4.5	4.8	3.2	4.0	3.0	5.9	3.9
塾で	3.9	4.4	3.5	4.1	3.6	5.7	4.8	4.1	1.7
家族旅行などで	3.9	5.6	2.4	4.9	2.6	5.4	3.7	2.3	4.1
児童館・コミュニティーで	2.7	3.6	2.0	3.4	1.9	1.7	3.7	2.1	2.7
その他	1.8	1.5	2.1	1.8	1.8	3.0	1.3	2.1	1.4
無回答	1.4	1.2	1.5	1.5	1.3	3.0	0.9	0.9	1.2

７．学校における環境保全活動への参加経験（問 10）

学校における環境保全活動への参加経験としては、「環境問題について、先生の話を聞いた」（56%）、「地域の掃除やごみ拾いなどに参加した」（50%）が半数以上にのぼる。また、全般的に町村部での活動が活発で、町村部の参加経験率は「夏休みなどの自由研究で環境のことを調べた」以外いずれも他の都市規模を上回っている。

学校における環境保全活動への参加経験を尋ねたところ、最も参加経験率が高かったのは「環境問題について、先生の話を聞いた」（56%）で、次いで「地域の掃除やごみ拾いなどに参加した」（50%）となった。これらに加え、「ごみ処理場や下水処理場などの施設を見学した」（41%）、「植物の栽培や動物の飼育、観察をした」（32%）、「山や川などで自然の観察をした」（27%）の経験率も３～４割と比較的多い。しかし、「みんなで環境問題の解決方法について話し合った」（20%）、「川や湖の水、空気や雨の状態について調べた」（18%）の経験率は２割前後、牛乳パックやケナフなどで紙づくりをした」（12%）、「夏休みなどの自由研究で環境のことを調べた」（8%）の経験率は１割前後と低くなっている。

【図表 7-1】学校における環境保全活動への参加経験（複数回答）（全体）



全般的に小学生の参加経験が中学生の参加経験を上回っているが、特に「環境問題について先生の話を聞いた」「ごみ処理場や下水処理場などの施設を見学した」「直物の栽培や動物の飼育、観察をした」「山や川などで自然の観察をした」「みんなで環境問題の解決方法について話し合った」での差が大きく、これらの小学生の参加経験率は中学生よりも 18～25 ポイント高くなっている。

性別では「植物の栽培や動物の飼育、観察をした」の参加経験率が男子（29%）より女子（35%）で高くなっている。

都市規模別では町村部の参加経験率が全般的に高く「環境問題について、先生の話を聞いた」（63%）、「地域の掃除やごみ拾いなどに参加した」（59%）が６割前後に達するなど、「夏休みなどの自由研究で環境のことを調べた」以外はいずれも他の都市規模を上回っている。

【図表 7-2】学校における環境保全活動への参加経験（複数回答）（学齢別、性別、都市規模別）

（%）

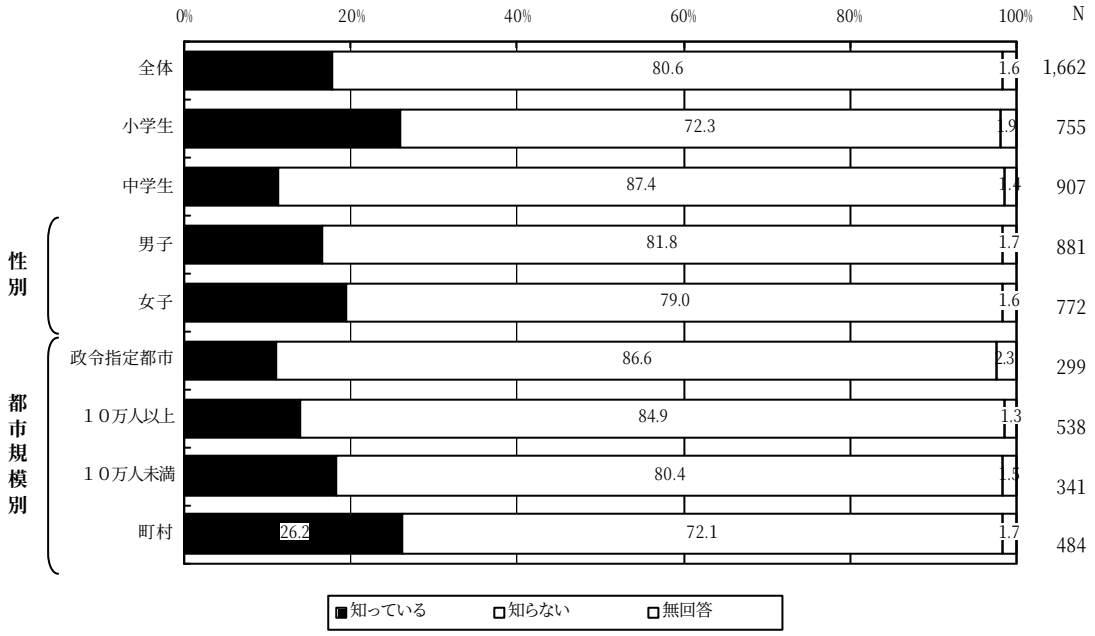
	全体	学齢別		性別		都市規模別			
		小学生	中学生	男子	女子	政令指定都市	10万人以上	10万人未満	町村
調査数	1,662	755	907	881	772	299	538	341	484
環境問題について、先生の話を聞いた	55.8	64.8	48.3	52.9	59.2	54.8	53.7	49.3	63.2
地域の掃除やごみ拾いなどに参加した	50.0	55.2	45.6	49.1	51.3	41.8	49.8	44.9	58.9
ごみ処理場や下水処理場などの施設を見学した	41.2	54.8	29.9	40.1	42.6	33.1	41.1	35.8	50.2
植物の栽培や動物の飼育、観察をした	31.7	44.1	21.4	29.2	34.8	25.8	29.7	27.3	40.7
山や川などで自然の観察をした	26.7	37.1	18.1	26.3	27.1	26.4	19.9	24.6	36.0
みんなで環境問題の解決方法について話し合った	20.3	29.9	12.3	19.0	22.0	16.1	20.1	8.8	31.4
川や湖の水、空気や雨の状態について調べた	17.9	24.6	12.2	16.8	19.0	14.4	13.8	11.4	29.1
牛乳パックやケナフなどで紙づくりをした	11.6	9.7	13.1	10.3	12.7	11.7	11.7	8.8	13.2
夏休みなどの自由研究で環境のことを調べた	8.3	7.9	8.6	10.1	6.2	9.4	8.2	7.3	8.5
特にない	9.6	3.4	14.7	11.1	7.9	13.4	11.0	11.4	4.3
その他	2.2	1.7	2.5	2.4	1.8	2.7	2.0	1.5	2.5
無回答	3.2	1.3	4.9	3.7	2.7	6.0	3.0	3.5	1.7

８．「こどもエコクラブ」の認知（問 11）

「こどもエコクラブ」の認知率は 18%。小学生、町村部の認知率は 26%と高い。

小中学生なら誰でも参加でき環境についての活動をする、「こどもエコクラブ」を「知っている」は 18%で５人に１人弱の割合である。

小学生の認知率は 26%で中学生（11%）よりも 15 ポイント高い。性別の認知度は男性 17%、女性 19%で女子の方がやや高い。

都市規模別にみると、都市規模が小さくなるほど認知率は高く、町村部では 26%となっている。

【図表 8-1】「こどもエコクラブ」の認知（学齢別、性別、都市規模別）